グスコープドリの伝記
宮沢賢治
グスクーブドリの伝記

一

森

グスクーブドリは、イーハートヴの大好きな森のなかに生まれました。おとうさんは、グスクーブドリという名高い木こりで、どんな大きな木でも、まるで赤ん坊を寝かしつけるようにわけなく切ってしまう人でした。

ブドリにはネリという妹があって、二人は毎日森で遊びました。二人はそこで木いちごの実を収め、わき水につけたり、空を向けたかわるがわる山鳩の鳴く音が、やっと聞こえ、まるで眠そうに鳴き出すのです。ほん、と鳥が眠そうに鳴き出しているときは、おかあさんが、家の前の小さな畑に麦を播いているときは、
二人はみちにむしろをしいてすわって、ブドリがんで薔の花を
煮たりしました。するところは、もういろいろの鳥が、二人
のばさばした頭の上を、まるで挨拶するように鳴きながらざ
あざあざあざあ通りすぎるのです。
ブドリが学校へ行くようになりますと、森はひるの間たいへ
んさびしくなりました。そのかわりひるすぎには、ブドリはネ
リといっしょに、森じゅうの木の幹に、赤い粘土や消し炭で、木
の名を書いてあるたり、高く歌ったりしました。
ホップのつるが、両方からのびて、門のようになっている
「カッコウドリ、トオルベカラズ」と書いたりもしました。
そして、ブドリは十になり、ネリは七つになりました。とこ
らはどういうわけですか、その年は、お日さまが春から変に白
くて、いつもなら雪がとけるとまもなく、まっしろな花をつけ
るこぶしの木もまるで咲かず、五月になってもたびたび霧がく
しやぐしゃ降り、七月の末になってもいつもこうに暑さが来ない
ために、去年播いた麦も粒の入らない白い穂しかできず、たい
ての果物も、花が咲いただけで落ちてしまったのでした。
そしてとうとう秋になりましたが、やっぱり栗の木は青いか
らのいがばかりでしたし、みんなでふだんたべるいちばんたい
せつなオリザという穀物も、一つぶもできませんでした。
ではもうひとりいさわぎになってしまいました。
ブドリのおとうさんもおかあさんも、たびたび薪を野原のほ
へ持って行ったり、冬になってからは何べんも大きな木を町
へそりで運んだりしたのでしたが、いつもがかりしたように
して、わずかの麦の粉などもって帰ってくるのでした。それで
グスクーヴドリの伝記

もどうにかその冬は過ぎて次の春になり、畑にはたいせつなし

ひどい病気のようでした。
ある日おとうさんは、じっと頭をかかえて、いつまでもいつまでも考えていましたが、にわかに起きあがって、おれは森へ行って遊んでくるぞ。と言いながら、よろよろ家を出て行きましたが、まっくらになってしまって帰って来ませんでしも、おかあさんはどうしたろうと、ときいて次の日の晩方になって、森がもう黒く見えるころ、おかあさんのはとてまって二人の顔を見ているばかりでした。んはにわかに立って、炉に搗をたくさんくべて家じゅうすっかり明るくしました。それから、わたしはおとうさんをさがしに行くから、お前たちはうちにいてあの戸棚にある粉を二人ですこしすったべなさいと言って、やっぱりよろよろ家を出て行きました。おかあさんは、泣いてあとから追いつて行きますと、おかあさん
「なんたらしいことをきかないこどもだ。」としかるように言
いました。
そしてまるで足早に、つまづきながら森へはいってしまいま
した。二人は何べんも行ったり来たりして、そこらを泣いて回
りました。とうとうここらえ切れなくなって、まっくらな森の中
へはいつって、いつかのホップの門のあたりや、わき水のあるあ
たりをあちこちうろうろ歩きながら、おかあさんを一晩呼びま
した。森の木の間からは、星がちちらと何か言うように暗の中を飛びま
したけれど、どこからも人の声はありませんでした。やみ
家へ帰って中へはいりますと、まるで死んだように眠ってしま
いました。
おかあさんの言った粉のことを思い出して戸棚をあけて見ま
すと、なかには、袋に入れたそば粉やこならの実がまだたくさ
粉をなめ、おとうさんたちがいたときのように出火をたきま
した。
それから、二十日ばかりぼんやり過ぎましたら、ある日戸口
で、「今日は、だれかいるかね。」と言ったものがありました。おとう
さんが帰って来たのかと思って、ブドリがはね出して見ま
すと、それは籠をしょった目の鋭い男でした。その男は籠の中から丸
い餅をとり出してぽんと投げながら言いました。あ
なさい。一人はしばらくあがれていましたら、
「さあ食べるんだ、食べるんだ。」とまた言いました。二人が
わこわたべはじめますと、男はじっと見ていましたが、
お前たちはいい子供だ。
けれどもいい子供だというだけでは
なんにもならん。
わしといつしょについておいで。
もっとも男
の子は強い。
わしも二人はつれて行けない。
おじさんの子、おま
に町へ行こう。
毎日パンを食べさせてやるよ。
おじさんといっ
ネリを抱きあげて、せなかの籠へ入れて、そのまま、
おおはいはい。
とどまりながら、風のように
家を出て行きました。
ネリはおもてではじめてわっと泣き出し、
「どろぼう、どろぼう。」と泣きながら叫んで追いかけました
が、男はもう森の横を通ってすうっと向こうの草原を走ってい
グスコーブドリの伝記

でした。

ブドリは、泣いてどなって森のはずれまで追いかけ行って行きま
したが、とうとう疲ればったり倒れてしまいました。

ブドリがふっと目をひらいたとき、いきなり頭の上で、いや
に平べったい声がしました。

「やって目がさめたちな。まだお前は飢餓のつもりかい。起きて
おれに手伝わないか。」見るとそれは茶いろなきのこしや、つぼを
かぶって外套にすぐシャツを着た男で、何か針金でこさえたも
のをぶらぶら持っているのです。
グスコーブドリの伝記

「もう飢餓は過ぎたの？
手伝って何を手伝うの？

ブドリがききました。

網をかけたのさ。

ここで網を掛けるの？

掛けるのさ。

網をかけて何にするの？

てぐすを飼うのさ。
見るするとすぐブドリの前の粟の木に、二人の男のはしごをかけてのぼっていて、一けん命何か網を投げたり、それを操ったりしているようでした。網も糸もいつこ見えませんでした。

あればてぐすが飼えるのさ。

飼えるのさ。うるさいこどもだな。おい、縁起でもないぞ。

てぐすも飼えないところにどうして工場なんか建てるんだ。飼
ゼ。

ブドリは泣き出しそうになりましたが、やっと考えた手伝う手を教えてやる。ここつねね。

それとも熱る手伝う手、けれどもどうして網をかけるの？

それはもちろん教えてやる。こいつをね。男は、手に持った針金の箇のようものを握手で引き伸ばしました。
男は大まちに右手の栗の木に歩いて行って、下の枝に引っ掛けた。さあ、今度はおまえが、この網をもって上へのぼって行くんだ。

「いいか。こういう具合にやるとはしごになるんだね。」
ブドリはしかたなく力をいっぱいにそれを青空に投げたと思いつつ、笑ってお日さまがまっ黒に見え逆しまに下へおちました。そしていつか、その男に受けとめてながらぶりぶりおこり出しました。
お前もいくじのないやつだ。なんというふにおふにやだ。おれが受け止めてやらなかったらお前は今ごろは頭がはじけてしまろう。おれはお前の命の恩人だぞ。これからは、失礼なことと言ってはならん。ところで、さあ、こんどはあっちの木へ行っちまりを投げました。ブドリは新しけいまりを渡しました。ブドリははしごをもって次の木へ乗りへたるぎはんもたべさせてやるよ。
男はまたブドリははしごをもって次の木へ登りへたるぎはんもたべさせてやるよ。
グスコーブドリの伝記

男はポケットから、まわりをうばかり出してブドリに渡すと、
すたすた向こうへ行ってしまいました。ブドリはまた三つばか
りそれを投げましたが、どうしてかも息がはあはあして、からだ
がだるくてたまらなくなりました。もう家へ帰ろうと思っていた、

「ああでも、たべものをもらってきてしまった。中からたばこ
をふかしながら、さっきの男が出て来ました。」

「ばくはもういやだよ、うちへ帰るよ。」

「うちっていうのはあそこか。あそこはおまえのうちじゃない。」

るぞ。なまけるな。木も栗の木ならどれでもいいんだ。
おれのてぐす工場だよ。あの家もこの辺の森もみんなおれが買い
てあるんだからな。

ブドリはもうやけになって、だまってその男のよこした蒸し
パンをむしゅみしやたべ、またまりを十ばかり投げました。
その晩ブドリは、昔のじぶんのうち、いまはてぐす工場になっ
ている建物のすみに、小さくなってねむりました。

さつきの男は、三四人の知らない人たちとおそらくまで炉ばた
で火をたいて、何か飲んだりしゃべったりしていました。次の
朝早くから、ブドリは森に出て、きのうのようにはたらきまし
た。

それから一月ばかりたって、森じゅうの栗の木に網がかかつ
てしまいますと、てぐす飼いの男は、こんどは栗のようなもの
あわ

がいっぱいいった板されを、どの木にも五六枚ずつつるさせま
グスコーブドリの伝記

した。そのうちに木は芽を出して森はまっ青になりました。す
る。木につるした板きれから、たくさんの小さな青じろい虫
が糸をたって列になって枝へはいあがって行きました。

ブドリたちはこんどは毎日薪とりをさせられました。その薪
が、家のまわりに小山のように積み重なり、栗の木が青じろい
ひものかたちの花を枝いちめんにつけるところになりました。あ
の板からはいあがって行った虫も、ちょうど栗の花のような色
とかたちになりました。そして森じゅうの栗の葉は、まるで形
もなくその虫に食い荒らされてしまいました。

それからまもなく、虫は大きな黄いろな薔を、網の目ごとに
かけはじめました。するとすぐ飼いの男は、狂気のようになって、
ブドリたちを守らせて、その薔を籠に集めさせました。それをこん
など
グスクーブドリの伝記

どこもならば鍋に入れてぐらぐら煮て、手で車をまわした。夜も昼もがらがらがから三つの糸車をまわして糸をとりました。こうしてこしらえた黄いろな糸が小屋に半分ばかりたまったころ、外に戻った織からは、大きな白い蛾がこれからぼろぼろぼろ飛びだしはじめました。てぐす銚いの糸をとりました。まるで鬼みたいな顔つきになって、じぶんも一生けん命をきりました。しかしつてどんなも蛾のほうは日ましに多く出るようになつた。そしていうのは森じゅうまるで雪でも飛んでいるようになりました。いちばんしまいの網をついて、町のほうが帰りはじめました。ちかにやよいの荷馬車

一人ずつ荷馬車について行きました。いままでにできた糸をみんなつけて、町のほうへ帰りはじめました。みんなも

がたったときに、てぐす銚いの男が、ブドリに、
グスコーブドリの伝記

おい、お前の来春まで食うくらいのものです家の中に置いてや

からな。それまでここで森と工場の番をしいるんだぞ。

と言って、やにやしながら荷馬車についてききと行っ

てしまいました。

ブドリはばんやりあとへ残りました。うちの中はまるできた

なくてあらしのあとのようで、ブドリが次の日に、家のはかやまわりを

片付けはじめましたら、つぐす飼いの男がいつもわっていた

所から古いボール紙の箱を見つけました。開いて見ると、つぐすの絵

がぎっしりはいっておりました。開いて見ると、つぐすの絵

や機械の図がたくさんある、まるで読めない本もありました。さ

いの仫々な木や草の図と名前の書いてあるものもありました。ブ

ドリはいつしようけんめい、その本のまねをして字を書い
春になりましたと、またあの男が六七人のあたりらしい手下を連れて、たいへん立派な乗りをしてやって来ました。そして次の日からすっかり去年のような仕事がはじまりました。そして網はみんななかかり、高いような板もつるされ、虫は枝にはい上がり、ブドリたちはまた、薪作りにかかることがなりました。ある朝ブドリたちが薪をつくって来ました。それからずうっと遠くでどーんという音がしました。しばらくたつと日が変にくらくなり、こまかな灰がばさばさばささささ降って来て、森はいちめんにまっ白になりました。それからずうっと遠くでどーんという音がしました。
おい、みんな。
もうだめだぞ。噴火だ。
噴火がはじまったん
だ。てぐすはみんな灰をかぶって死んでしまった。
みんな早く引き揚げてくれ。
おい、ブドリ、お前ここにいたかつたらいて
もいいが、こんどはたべ物は置いてやりないぞ。
前にここに
いてもあぶないからな。
お前も野原へ出て何かかせぐほうがいい。
そう思ったかと思うと、もうどんどん走って行って
した。ブドリが工場へ行って見たときは、もうだれもおりませ
んでした。そこでブドリは、しょんぼりとみんなの足跡のた
た白い灰をふんで野原のほうへ出て行きました。
沼ばたけ
ブドリは、いつもいの灰をかぶった森の間を、町のほうへ半
日歩きつづけました。灰は風の吹くたびに木からばさばさ落ち
て、まるでけむりか吹雪のようでした。けれどもそれは野原へ
近づくほど、だんだん浅く少なくなって、ついには木も緑に見
え、みちの足跡も見えないくらいになりました。

とうとう森を出切ったとき、ブドリは思わず目をみはりまし
t。野原は目の前から、遠くのまっしろな雲まで、美しく桃い
ろと緑と灰いろのカーテンでできているようでした。そばへ寄っ
tて見ると、その桃いろのは小さな穂を出して草がぎつじつはえ、
灰いろのは浅い泥の沼でした。そしてどれも、低い幅のせま
い土手でくぎられ、人は馬を使ってそれを掘り起こしからき
グスコーブドリの伝記

回したりしてはらいていました。

ブドリがその間を、しばらく歩いて行きますと、道のまん中
に二人の人があった。大声で何か叫んで歩きまわります。右側のほうのひげの黒い人が言いました。

「なんでもかんでも、おれは山師張るときめた。

さんのように言ったらやめるんだ。そんなに肥料うんと入れて、薬はとれるたって、実は一粒もとれないんだ。

うちにや、おれの見込みでは、ことしは今までの三年分暑い

に相違ない。一年で三年分とって見せる。

「やめろ。やめろ。やめろ。やめろ。」

「うんにや、やめな。花はみんな埋めてしまったから、こんど
グスコーブドリの伝記

は豆玉を六十枚入れて、それから鶏の糞、百馮入れるんだ。急
がしったらなんの、こう忙しくなければささげのつるでもいいか
ら手伝いに頼みたいんだ。

ブドリは思わず近寄っておじぎをしました。

「そんならぼくを使ってくれませんか」

すると二人は、「ぎょっとしたように顔をあげて、あごに手を
あててしばらくブドリを見ていましたが、赤ひげがにわかに笑
い出した。

「よしよし。前前に馬の指箇とりを頼むからな。すぐおれにつ
いて行くんだ。それではまず、のるかそれか、秋まで見ててく
れ。さあ行こう。ほんとに、ささげのつるでもいいから頼みた
せ。

赤ひげは、ブドリとおじいさんにかわるがわる言い
ながら、さっさと先に立って歩きました。

あとではおじいさん
年寄りの言うこと聞かないで、いまに泣くんではない。

「そとぢがゅべ、しばらくこっちを見送っているようですね。
きながら、しばらくこっちを見送っている。
それからブドリは、毎日沼はたげへは行って馬を使っている。
だろうつなぶされて、泥沼に変わったのです。
しゃっと泥水をはねあげて、みんなの顔へ打ちつけました。
一つの沼にたけがすめばすぐ次の沼にたけへはいるのです。
一日がとても長くて、しまいには歩いているのかどうかもわからない。
なくなったり、泥が鈍のような、水がスープのような気がした。
うろこのような波をたて、遠くの水をブリキいろにして行きま
した。そらでは、毎日甘くすっぱいような雲が、ゆっくりゆつ
くるながれていて、それがじつにうらやましそうに見えました。こうして二十日ばかりたちますと、やっと沼ばたけはすっかりりどろどろになりました。次の朝から主人はまるで気が立って、あちこちから集まってきた人たちといつしょに、その沼ばたけに緑いろの槍のようなおりざの苗をいちめん植えました。それぞれに十日ばかりで済むと、今度はブドリたちを連れて、今まで手伝ってもらった人たちの家へ每日働きにでかけました。それやっと一まわり済むと、こんどはまたじぶんの沼ばたけへ戻って来て、每日每日草取りをはじめました。ブドリの主人の苗は大きくなってしままるで黒いくらいなのに、となりの沼ばたけはぼんやりしたうすい緑いろでしたから、遠くから見ても、二人の沼ばたけははっきり境まで見かかりました。七日ばかりで草取
この日がある朝、主人はブドリを連れて、じょんの沼ばたけを通りながら、にわかに「あっ」と叫んで棒立ちになっていました。見るとくちびるのいろまで水いろになって、ぼんやりします。病気が出たんだ。主人が言った。頭でも痛いんですか。ブドリはぎましました。おれでないよ。オリザよ。それ。主人は前のオリザの株を指さしました。ブドリはしゃがんでしらべてみますと。ななるほど。どの葉にも、いままで見たことのない赤い点々がついていました。主人はだまっておしおと沼ばたけを一まわりしました。ブドリも心配してついて行きますと、主人はだまって巾を水でしぼって、頭にのせると、そのまま板の間に寝てしまいました。するとまもなく、主人のおかみ
さんが表からかけ込んで来ました。

オリザへ病気が出たというのはほんとうかい。

ああ、もうだめだよ。

どうにかならないのか。

だめだろう。すっかり五年前のとおりだ。

だから、あたしはあんたに山師をやめろといったんじゃないか。

おかげさんのはおろおろ泣きはじめました。すると主人がにわ

かに元気になってむくり起き上がりました。

よう。アイーハトーヴの野原で、指折り数えられる大百姓のお

れが、こんなことで参るか。よし。来年こそやるぞ。ブドリ、

おまえおれのうちへ来てから、まだ一晩も寝たいくらい寝たこ

とがないな。さあ、五日でも十日でもいいから、ぐうといくく

 fasco-budoori no denki
らい寝てしまえ。おれはそのあとで、あすこの沼ばたけでおも

しっかり手品をやって見せるからな。その代わりことしの冬は、

家じゅうそぼばばかり食うんだぞ。おまえそばはすきだろうが。

それから主人はさっさと帽子をかぶって外へ出て行ってしまい

ました。

ブラドリは主人に言われたとおり納屋へはいって眠ろうと思う

なや

ので、またのろのろそっちへ行って見ました。

ましたのが、なんだかやっぱり沼ばたけが苦になってしかたない

ので、またのろのろそっちへ行って見ました。見ると沼ばたけには水がいっぱいで、オリザの株は葉を

やっと出しているだけ、上にはぎらぎら石油が浮かんでいるの

いまおれ、この病気を蒸し殺してみるところだ。
「石油で病気の種が死ぬんですか。」とブドリがききますと、

人は、「頭から石油をつけられたら人だって死ぬだ。」と言いまが

ほうと息を吸って首をちぎりました。その時、水下の沼ばたけ

持ち主が、肩をいかからして、息を切ってかけて来て、大きな

声でどなりました。

なんだって油など水へ入れるんだ。みんな流れて来て、おれ

のほうへはっていうぞ。

主人は、やけくそに落ちついて答えました。

なんだって油など水へ入れるったって、オリザへ病気がつい

たから、油など水へ入れるのだ。

なんだってこんなねおれのほうへ流すんだ。

なんだってそんなねおいまえのほうへ流すったって、水は流れ
「いんだ。」

「なんだっておまえのほうへ水行かないのでおれのほうが水口とめないかっ
たって、あそこに水口とめないなら水口とめないのだ。」

「あとの男むずかしい男でな。ここちで水をとめるると、とめたと
いておるからわざと向こうにとめさせたのだ。あすことさえ
とめれば今夜じゅうに水はすっかり草の頭までかかるからな、
さいあ帰ろう。」

主人はさきに立ってたすたすた家へあるきはじめま
した。
次の朝ブドリはまた主人と沼ばたけを行ってみました。主人は水の中から葉を一枚つってしきりにしゃべっていましたが、やっぱり浮かない顔でした。その次の日もそうです。その次の日もそうでした。その次の朝、とうと行って、となりの水口をかわして来い。

ブドリは、言われたところこわしに来ました。おまえあたりへ行っていて、まえた水は、恐ろしい勢いですとなりの田へ流れています。きっと、大きな夜をもってやってきました。

やあ、なんだってひとの田へ石油ながすんだ。

主人がまた、腹の底から声を出して答えました。
した。水はどんどん退き、オリザの株は見える根もとまで出
て来ました。すっかり赤い斑ができて焼けたようになっていま
す。
「さあおれの所ではもうオリザ刈りをやるぞ。」
主人は笑いつつ言う。それからブドリと歩きます。そしてその年はほうとこうに主人の言ったとおり、
ブドリの家では蕎麦ばかり食べました。次の春になると主人が
言いました。
「ブドリ、ことしは沼ぼたけは去年よりは三分の一減ったから
もすこし、仕事はよほどが違う。そのかわりおまえは、おれの死んだ
息子の読んだ本をこれから一生けん命勉強して、いままでおれ
を山師だといってわらったやつらを、あっと言わせるような立
派なオリザを作るくふうをしてくれ。

そして、いろいろな本を一山ブドリに渡しました。ブドリは仕事のひまに片つぱしからそれを読みました。ことにその中のクーボーという人の物の考え方を教えた本はおもしろかったので何べんも読みました。またその人がイーハトーヴの市で何月の学校をやってているのを知って、思いったりしました。

そして早くその夏、ブドリは大きな手柄をたてました。それは去年と同じころ、またオリザに病気がでかかったのを、オリザの木の灰と食塩を使って食いとめたのです。それに八月の稈の一枝ごとに小さな白い花が咲き、花はだんだん水いろの主にかわって、風にゆらゆら波をたてるようになった。
人はもう得意の絶頂でした。来る人ごとに、
「なんの、おれも、オリザの山師で四年しくじったけれども、こ
としは一度に四年分とれる。これもまたなかなかいいもんだ。

ところがその次の年はそうは行きませんでした。植え付けの
ころからさっぱり雨が降らなかったために、水路はかわいてし
まい、沼にはひびが入って、秋のとりいれはやっと冬じゅう食
べるくらいでした。来年こそと思っていましたが、次の年もま
た同じようなひでりでした。それからも、来年こそ来年こそと
思いながら、ブドリの主人は、だんだんこやしを入れることが
できなくなり、馬も売り、沼ばたけもだんだん売ってしまった

ある秋の日、主人はブドリにつらそうに言いました。
ブドリ、おれもとはイーハトーヴの大百姓だったし、ずいぶんかせいで来たのだが、たびたびの寒さと早魃のために、いまでは沼ばたけも昔の三分の一になってしまったり、来年はもう入れるやしもないのだ。おれだけでないと。来年こやしを買って入れる人ったらもうイーハトーヴにも何人もないだろう。こういうあんばいでは、いつになっておまえにはたらいてもらう礼をするというあてもない。おれのところで暮らしてしまうのはあんまり気の毒だから、おまえも若い働き盛りを。

ブドリはいままでの仕事のひどかったことも忘れてしまって、もう何もないから、ここで働いていたいとも思いましたが、
グスコーブドリの伝記

四
クーボー大博士

考えでみると、いてもやっぱり仕事もそんなないので、主人に何べんも何べんも礼を言って、六年の間はたちいた沼ばたけと主人に別れて、停車場をさして歩きました。

ブドリは三時間ばかり歩いて、停車場へ来ました。それから切符を買って、イーハトーヴ行きの汽車に乗りました。汽車はいくつもの沼をだけをどんどんどんうしろへ送りながら、もう一散に走りました。その向こうには、たくさんの黒い森が、次から次と形を変え、やっぱりうろのほうへ残されて行くのでした。ブドリはいろいろな思いで胸がいっぱいでした。早くイーハトーヴの市に着いて、あの親切な本を書いたクーボーく
グスコーブドリの伝記

「もう五満丁行ってきてみな。」とかいうのでした。そしてブ
ドリがやっと学校をさがし当てたのはもう夕方近くでした。そ

の大きなこわれかかった白い建物の二階で、だれか大きな声で

しゃべっていました。

「今日は。」ブドリは高く叫びました。だれも出てきませんでし

た。

「今日はあ。」ブドリはあらん限り高く叫びました。だれも出てきませんでし

頭の上の二階の窓から、大きな灰いろの顔が出て、めがねが二

つぎらりと光りました。それから、

「今授業中だよ、やかましいやつだ。用があるならはいって来

い。」とどなりつけて、すぐ顔を引っ込めますと、中ではおおぜ

い。なるべく足音をたてないように

ブドリはそこで思い切って、なるべく足音をたてないように
グスコーブドリの伝記

二階にあって行きまると、階段のつぎ当たりの扉があいてい
て、じっと大きな教室が、ドリのまっ正面にあらわれました。
中にはさまざまの服装をした学生がぎっしりです。向こうは大
きな黒い壁になっている、そこにたくさんの白い線が引いてあ
り、さっきのせいの高い目がねをかけた人が、大きな棚の形の
模型をあちこち指さしながら、さっきのままの高い声で、「
なに説明しておりました。

ドリはそれを一目見ると、「ああこれは先生の本に書いてあつ
た歴史の歴史ということの模型だなと思いました。模型はこんど
どは大きなるかでのような形になりました。またがちつと鳴って奇
体な船のような形になりました。 先生は笑い

みんなはしきりに首をかたむけて、どうもわかんなというふ
「そこでこういう図ができる。」
「左手にもチョークをもって、さっさと書きました。」
「もみんな一生けん命そのまねをしました。ブドリもふとところから、いままで沼はたけで持っていたきたなない手帳を出して図を書きとりました。先生はもう書いてしまって、じころじろ学生たちの席を見まわしていま。ブドリはそっとぎきました。
「あああ。」とあくびをしました。ブドリはそっとぎきました。
「ね、この先生なんて言うんですか。」
いて見せるのでした。すると大博士はそれをちょっと見て、一
言か二言質問をして、それから白黙でえりへ、「合」とか、「再
来」とか、「奮励」とか書くのでした。学生はその間、いかにも
心配そうに首をちぎめているのでした。それからそっと肩を
すぼめて廊下まで出て、友だちにそのしるしを読んでもらって、
ようこんだりしょげたりするのですでした。
ぐんぐん試験が済んじ、よいよブドリー人になりました。
ブドリーがその小さなきたない手帳を出したとき、クーボー大博
士は大きなあくびをやりながら、かがんで目をぐっつま
けるようにしましたので、手帳はあぶなく大博士に吸い込まれ
るようになりました。ところが大博士は、うまそうにこくっと
一つ息をして、「よ
ろしい。この図は非常
に正しくで
きている。そのほ
かのところ
グスコーブドリの伝記

は、なんだ。はあ、沼ばたけのこやしのことによ、馬のたべ物
のことをね。では問題に答えなさい。工場の煙突から出るけむ
りには、どういう色の種類があるか。

「黒、緑、黄、灰、白、無色。それからこれらの混合です。」

大博士はわらいました。

「無風のけむりはたいへんいい。形について言いたまえ。」

「風のためには、風のためにもよりますが、その傾きは風の程度に従います。波やいくつ
めになりますが、その傾きは風の程度に従います。波やいくつ
もそれになるのは、風のためにもよります。

一時はけむりや
煙突のもっと癖のためです。あまり煙の少ないときは、コルク抜

弶
きの形にもなり、煙も重いガスがまじれば、煙突の口から房に
なって、一方ないし四方におちることもあります。
「よろしい。きみはどういう仕事をしているのか。」
「仕事をみつけに来たんです。」
「おもしろい仕事がある。名刺をあげるから、そこへすぐ行き
ください。」博士は名刺をとり出して、何かをするする書き込ん
でドリにくれました。ドリはおじぎをして、戸口を出て行こう
としますと、博士はちょっと目で答え、
「なんだ、こみを焼いてるのかな。」と低くつぶやきながら、テー
ブルの上にあった顰に、白磁のかけらや、はんけちや本や、み
んでつしょに投げ込むで戸さのちにかかえ、さっき顔を出した
窓から、 impunityと外へ飛び出しました。びっくりしてドリが
窓へかけよって見ますと、いつか大博士は玩具のような小さな
飛行船に乗って、じぶんでハンドルをとりながら、もううす青
いもやのこめた町の上を、まっすぐに向こうへ飛んでいるので
した。ブドリがいよいよあきれて見ていまずと、まもなく大博
士は、向こうの大きな灰いろの建物の平屋根に着いて、船を何
かかざのようなものにつなぐと、そのままばろっと建物の中へ
はいって見えなくなってしまった。

五
イーハート・ヴ火山局
グスコーブドリの伝記

おりました。ブドリは玄関に上がって呼び鈴を押しますと、すぐにブドリを突き当たりの大きな室へ案内しました。そこでいまだに見たこともないような大きなテーブルが
あっ、そのまん中に一人の少し髪の白くなっ
た人のよそそうな

書いていました。そしてブドリのはいって来たのを見ると、す
ぐ横の椅子を指さしながら、また続いて何か書きつけてい
ます。その室の右手の壁いっぱいに、イーハートーヴ全体の地図が、美
しく色どった大きな模型に作ってあって、鉄道も町も川も野原
もみんな一目でわかるようになってしまおり、そのまん中を走るせ
ぼねのような山脈と、海岸に沿って縁をとったようになってい
る山脈、またそれから枝を出して海の中に点々の島をつくって
グスコーブドリの伝記

いる一列の山々には、みんな赤や橙や黄のあかりがついていて、それがあかわるがわる色が変わったりジーと蟬のように鳴ったり、数字が現われたり消えたりしているのです。下の壁に添った棚には、黒いタイプライターのようなものが三列に百でも数かんくらい並んで、みんなしずかに動いたり鳴ったりしているのです。ボドリがわれを忘れてもとれておりますと、その人が受話器をこっとと置いて、ふとところから名刺入れを出して、一枚の名刺をボドリに出しながら「ああたが、グスコーブドリ君ですか。私はこういうものです」と言いました。見ると、イー

人はボドリの挨拶にあえないでもじもじしているのを見ると、

ざっさキーボー博士から電話があったのでお待ちしていまし
た。まあこれから、ここで仕事をしながらしっかり勉強してご
らんなさい。ここの仕事は、去年はじまったばかりですが、じ
つに責任のあるもので、それに半分はいつも噴火するかわかりな
い火山の上で仕事するものなのです。それに火山の癖というも
のは、なかなか学問でわかるということではありません。われわれ
は、あっつしっかりやりなければならんのです。では今晩
はあっつにあなたの泊まるところがありませんから、そこでゆっくり
お休みなさい。あしたこの建物じゅうをすっかり案内しま
すから。

次の朝、ブドリはペンネン老技師に連れられて、建物のなか
を一々つれて歩いてもらい、さまざまな機械やしかけを詳しく
教わりました。その建物のなかのすべての器械はみんなイーハ
トーヴじゅうの三百幾つかの活火山や休火山に続いていて、そ
これらの火山の煙や灰を嘔いたり、熔岩を流したりしているよう
すはもちろん、火傷ばかりをしていない古い火山でも、その中
の熔岩やガスのもようから、山の形の変わりようまで、みんな
数字になったり図になったりして、あらわれて来るのです。
そしてはげしい変化のあるたびに、模型はみんな別々の音で鳴
るのです。

ブドリはその日からベンネン老技師について、すべての器械
の扱い方や観測のしかたを習い、夜も昼も一心に働いたり勉強
したりしました。そして二年ばかりたちますと、ブドリはほか
の人たちといつしょにあちこちの火山へ器械を据え付けに出さ
れたり、据え付けがある器械の悪くなったのを修繕にやられた
りもするようになりましたので、もうブドリにはイーハートーヴ
の三百数個の火山と、その働き具合は掌の中にあるようにわ
たなこころ
かつて来ました。じつにイーグトーヴには、七十数の火山が毎日煙をあげた。熔岩を流したりしているのでしたし、五十数つの休火山は、いろいろなガスを嘔いたり、熱い湯を出したりしていました。そして残りの百六七十の死火山のうちにも、いつまた何をはじめるかわからないものがあるのでした。ある日ブドリが老技師とならんで南のほうの海岸にある火山が、むくむく器械に感じ出して来ました。老技師が叫びました。「ブドリ君。サンムトリは、けさまで何もなかったね。」はい、いままでサンムトリのはたらいたのを見たことができありません。ああ、これはもう噴火が近い。けさの地震が刺激したのだ。
この山の北十キロのところにはサンムトリの市がある。今度爆発すれば、たぶん第三の一分の一、北側をはねとばして、牛やテールブルがもらいの岩は熱い灰やガスといっしょに、どしほどしほサンムトリ市におちてくる。どうでも今のうちに、この海に向いたほうへボーリングを入れて傷口をこさえて、ガスを抜くか熔岩を出させるかしなければならない。今すぐ二人で見に行こう。二人はすぐにしたくして、サンムトリ行きの汽車に乗りました。そこは、サンムトリ山の古い噴火口の外輪山が、海のほうへ向いてい
グスコーブドリの伝記

欠けた所で、その小屋の窓からながめますと、海は青や灰いろ
の幾つもの緑になって見え、その中を汽船は黒いけむりを吐き、
銀いろの水脈を引いていくますべているのです。

老技師はしずかにすべての観測機を調べ、それからブドリに
言いました。

「きみはこの山はあと何日ぐらいで噴火すると思うか。」
「一度はもたない。もう十日もたない。早く工作してしま
ないと、取り返しのつかないことになる。私はこの山の海に向
いたほうが、あすこがいちばん弱いと思う。」老技師は山腹の
谷の上のうず緑の草地を指さしました。そこを雲の影がしずか
に青くすべっているのです。

あすこには熔岩の層が二つしかない。あとは柔らかな火山灰
と火山礫の層だ。それによくこまでは牧場の道も立派にあるか
ら、材料を運ぶことも造作ない。ぼくは工作隊を申請しよう。
老技師は忙しく局へ発信をはじめました。その時足の下では、
つぶやくようなかなかな音がして、観測小屋はしばらぐぎしさ
しっきりました。老技師は器械をはなれました。
「局からすぐ工作隊を出すそうだ。工作隊といつも半分決死
隊だ。私はいままでに、こんな危険に追った仕事をしたことが
ない。」
「ぎっとできる。装置には三日、サンマトリ市の発電所から、電
線を引いてくるには五日かかるな。」
技師はしばらく指を折って考えていたが、やがて安心し
たようにまたしずかに言いました。
にかくブドリ君。一つ茶をわかして飲もうではないか。あ

『ブドリは持って来たアルコールランプに火を入れて、茶を
落ちたのか、海はさびしい灰いよに変わり、たくさんの白い波
がしらは、いったんに火山のそそに寄せて来ました。
ふとブドリはすぐ目の前に、いつか見たことのあるおかしな
形の小さな飛行船が飛んでいるのを見つけました。
老技師もは
ねありました。
あ、クーボー君がやって来た。ブドリも続いて小屋をとび
出しました。飛行船はもう小屋の左側の大きな岩の壁の上にと
まで、中からせの高いクーボー大博士がひらりと飛びおり
ていました。博士はしばらくその辺の岩の大きな白け目をさが
ていました。
手早くねじして見つかったが、やっとそれを見つけたといえば見えて、
お茶をよばれに来たよ。ゆれるかい。
「大博士はにやにやわらって言いました。老技師が答えました。
まだそんなでない。けれども、どうも岩がぼろぼろ上から落ちているらしいんだ。」
どうしてその時、山はにわかにおこったように鳴り出し、ブドリは目の前が青くなったり思いました。
岩へしがみついていましたし、飛行船も大きな波に乗った船のようになりくりゆれておりました。
地震はやっとやみ、クーボー大博士は起きあがってすたすたと小屋へはいって行きました。中ではお茶がひっくくり返って、
たにちがいない。
老技師が言いました。

「今のはずくらの足もとから、北へキロばかり、地表下七百メートルぐらいの所で、この小屋の六七十倍ぐらいの岩の塊が熔岩の中へ落ち込んだらしいのだ。ところがガスがいいよ最後の岩の皮をはね飛ばすまでには、そんな塊を百も二百も、じぶんのかだからの中にとらなければなららない。」
大博士はしばらく考えていましたが、

「そうだ、僕はこれで失敬しよう。」と言って小屋を出て、いつかひらと船に乗ってまいりました。老技師とボドリは、大博士があかりを二三度振って挨拶しながら、山をまわって向こうへ行くのを見送ってまた小屋にはいり、かわるがわる眠ったり観測したりしました。そして明け方ふもとへ工作隊がつきます。
グスコーブドリの伝記

と、老技師はブドリを一人小屋に残して、きのう指さしたあの草地まで降りて行きまし。みんなの声や、鉄の材料の触れ合う音は、下から風の吹き上げるときは、手にとるように聞こえました。ペンネン技師からはひっきりなし、向こうの仕事の進み具合も知らせてよこし、ガスの圧力や山の形の変わりようも尋ねて来ました。それから三日の間は、はげしい地震や地鳴りのなかで、ブドリのほうもふもとのほうもほとんど眠るひまさえありませんでした。その四日目の午前、老技師からの発信が言って来ました。

ブドリ君だな。すっかりしたくができた。急いで降りてきたまえ。観測の器械は一ぺん調べてそのままにして、表は全部持つひようら。もうその小屋はきょうの午後にはなくなるんだから。
ブドリはすっかり言われたとおりにして山を降りて行きましょう。

老技師が言いました。

「では引き上げよう。みんなしたくして車に乗りたまえ。」

天幕を張りたまえ。そしてみんなで眠るんだ。みんなは、物を

との中どこで、技師は自動車をとめさせました。車は列になって山

のすそを一散にサンムトロの市に走りました。ちょうど山と市

ひとことも言えずに、そのとおりにして倒れるようにねむって
しまいました。その午後、老技師は受話器を置いて叫びました。
さあ電線届いたぞ。ブドリ君、始めるよ。老技師はスイッチを入れました。ブドリたちは、天幕の外に出、サンムトリの中腹を見つめました。野原には、白百合がちめんに咲き、その向こうにサンムトリが青くひそり立っていました。思わにサンムトリの左のすそがぐらぐらとゆれ、まる黒なけむりがぱっと立ったと思うとまっすぐに天までのぼって行つがんきらきら流れ出して、見るまにうすつと扇形にひろがりな、百樺の花もいちめんゆれ、それからごうつというような大きな音が、みんなを倒すくらい強くやってきました。それから風がどうと吹いて行きました。
「やったやった。」とみんなはそっちに手を延ばして高く叫びま
した。この時サンムトリの煙は、くずれるようにそらいっぱい
ひろがって来ました。たちまちそらはまっ暗になって、熱い
こいしがばらばらばら降ってきました。みんなは天幕の中
にはいった心配そうにしていましたが、ペンネン技師は、
時計を見ながら、
「ブドリ君、うまく行った。危険はもう全くない。
市のほうへ
は灰をここし降らせるだけだろう。」
と言いました。こいしはだ
なんだん灰にかわりました。それもまもなく薄くなって、みんな
はまた天幕の外へ飛び出しました。野原はまるで一めんねずみ
いろになって、灰は一寸ばかり積もり、百合の花はみんな折れ
えて灰に埋まり、空は変に緑いろでした。そしてサンムトリのす
そには小さなこぶができて、そこから灰いろの煙が、まだどん
グスコーブドリの伝説

第一

グスコーブドリは、創世神の黒羽に生まれたとされ、人間の始祖である。彼はグスコーブドリを初めとして、人間の世界を創り出し、万物ともに共生の精神をもたらした。グスコーブドリの姿は、自然の中での生息を求める生命体の象徴であり、彼の存在は、人類の歴史の中で重要な役割を果たしている。
その年の六月、ブドリはイーハトーヴのまん中にあたるイーハトーヴ火山の頂上の小屋におまりました。下はいちめん灰いろをした雲の海でした。そのあちこちからイーハトーヴじゅうの火山のいだだきが、ちょうど島のようにお黒出ておりました。そした雲のすぐ上を一隻の飛行船が、船尾からまっ白な煙を噴いて、一つの峰から一つの峰へちょうど橋をかけるように飛びまわって、きりなってしずかに下の雲の海に落ちかぶさり、まもなく、いちめんの雲の海にはうす白く光る大きな綿が山から山へ張りわたされた。いつか飛行船はけむりを納めて、しばらく挨拶

に雲の中へ沈んで行ってしまいました。
受話器がジとも鳴りました。ペンネン技師の声でした。

飛行船はいま帰って来た。下のほうのしたくはすっかりいい。

雨はざあざあ降っている。もうよかろうと思う。はじめてくれたまえ。

ブドリはぼたんを押しました。見る見るさつきのけむりの網は、美しい桃いろや青や紫に、パッパッと目もさめるようにかがやきながら、ついたり消えたりしました。ブドリはまるでうっととりとしてそれを見とれました。そのうちにだんだん日は暮れかからないようになりました。

硝酸アムモニアはもう雨の中へでてきている。量もこれぐらいならちょうどいい。移動のぐあいもいいらしい。あと四時間や
グスコーブドリの伝記

それでもこの地方は今月中たくさんのだろう。
づつてやっかにのぼってくるのでした。そして雲が青く光るときは変に白っ
てくれたまえ。

ドリはもうねれしくてはね上がりたいくらいでした。
この雲の下で昔の赤ひげの主人も、となりの石油がこやしに
なるかと言った人も、みんなよろこんで雨の音を聞いていた。
そしてあすの朝は、見違えるように緑いろになったオリザの株
を手でなでたりするだろう。まるで夢のようだと思いつつ、
雲のまっくらになったり、また美しく輝いたりするのをながめ
ておりました。ところがそれは月が出るのでした。大きな黄いろな月がしす
ところがそれは月が出るのでした。大きな黄いろな月がしす
グスコーブドリの伝記

ぼく見え、桃いろに光るときは何かわらっているように見える

受話器はジーと鳴りました。

一寸ではだいぶ雷が鳴りだして来た。網があちこちひだれ

う十分ばかりでやめよう。

ブドリは受話器を置いて耳をすました。新聞が悪口を言うからも

でもこっちでもぶつぶつぶつぶつぶつぶやっているのです。よく

気をつけて聞くとやっぱりそればきれぎれの雷の音でした。

ブドリはスイッチを切りました。にわかに月のあかりだけに

なった雲の海は、やぼりしずかに北へ流れています。ブドリ

は毛布をからだに巻いてぐっすり眠りました。
その年の農作物の収穫は、気候のせいもありましたが、十年間もなかったほど、よくできましたので、火山局にはあっ
ちからもこっちからも感謝状や激励の手紙が届きました。ブドリははじめてほんとうに生きがいがあるようにと思いました。
ところがある日、ブドリがタチナという火山へ行った帰り、
とりいれの漬んでがらんとした沼ばたけの中の小さな村を通
って、一軒の雑貨や菓子を買ってている店へ寄って、
「パンはありませんか」とぎきました。するとそこには三人の
はだしの人たちが、目をまっ赤にして酒を飲んでおりました
か。
一人が立ち上がって、「パンはあるが、どうも食われないパンでな。」
「そとぢがゅべ。」
「ぱん、おかしなことを言いますと、みんなはおもしろそうにブドリの顔を見てどっと笑いました。ブドリはいやになって、ふいっと表へ出ましたら、向こうから髪を角刈りにしたせせの高い男が来て、いきなり、「そうだ。ブドリは何げなく答えました。その男は高く叫びました。」
「火山局のブドリが来たぞ。みんな集まれ。」
「お、お前、ことしの夏、電気でこやし降らせたブドリだな。」
「そうだ。」
「そとぢがゅべ〣」
グスコーブドリの伝記

すと、もうブドリはもとの元気になっていいました。そして新聞で、あのときの出来事は、肥料の入れようをまちがって教えて農業技師が、オリザの倒れたのをみんな火山局のせいにして、ごまかしていたためだということを読んで、大きな声で一人で笑いました。

その次の日の午後、病院の小便がはいって来て、「ネリといううござ婦人のおかげだというお話を読んで、一人の日に焼けた百姓のおかみさんがそうな人が、おずおずとはいって来ました。それはまるで変わってしまったが、まもなく森の中からだれかにれて行かれたネリだったのです。二人はしばらく物も言えませんでしたが、やっとブドリが、その後
のことをたずねますと、ネリもぼつぼつといいハトの百姓のことを、今までのことを話しました。ネリを連れて行った
あの男は、三日ばかりの後、めんどうくさくなかったのか、ある
小さな牧場の近くへネリを残して、どこかへ行ってしまったの
でした。
ネリがそこらを泣いて歩いていますと、その牧場の主人がか
わいそうに思って家へ入れて、赤ん坊のお守をさせたりしてい
ました。だんだんネリはなんでも働くようになったので、と
うとう三四年前にその小さな牧場のいちばん上の息子と結婚し
たというのです。そしてことしは肥料も減ったので、いつも
なら厩肥を遠くの畑まで運び出さなければならず、たいへん難
儀したのを、近くのかぶら畑へみんな入れたし、遠くの玉蜀黍
なことも言いました。またあの森の中へ主人の息子といっしょに何べんも行って見ただけれども、家はすっかりこわれていたし、ブドリはどこへ行ったかわからないので、いつもがっかりして帰っていたら、きのう新聞で主人がブドリのけがをしたことを読んだので、やっとこっちへたずねて来たということも言いました。ブドリは、なおったらきっとその家へたずねて行ってお礼を言う約束をしてネリを帰しました。

九 カルボナード島

赤ひげの主人の家にも何べんもお礼に行きました。もうよほど年はとっていましたが、やはり非常に元気で、
ゆでした毛の長いうさぎを千匹以上飼ったり、赤い甘藍ばかり畑に作ったり、相変わらずの山師はやっていましたが、暮らしはずうっといいようでした。

ねりには、かわいらしい男の子が生まれました。冬に仕事がひまになると、ねりはその子にすっかりこどもの百姓のようなかたちをさせ、主人といっしょに、ブドリの家にたずねて来て、泊まって行ったりするのです。

ある日、ブドリのところへ去ぐべき男にブドリといっしょに使われていた人がたずねて来、ブドリたちのおとうさんのお墓が森のいちばんはずれの大きな柵の木の下にあるということを教えて行きました。それは、はじめ、てぐす飼いの男が森に来て、森じゅうの木を見てあるいたとき、ブドリたちのおとうさんにおとせられた冷たくなったからだを見つけて、ブドリに知らせた。
グスコーブドリの伝記

ないように、そっと土に埋めて、上へ一本の樺の枝をたててお
いったというのでした。ドドリは、
すぐネリたちをつれてそこへ
行って、白い石灰岩の墓をたてて、それからもその辺を通るた
びにいつも寄ってくるのでした。

そしてちょうどドドリが二十五の年でした。どうもあの恐ろ
しい寒い気候がまた来るような模様でした。測候所では、
太陽の調子や北のほうの海の氷の様子から、その年の二月にみんなへ
その他もあリませんでした。それが一足ずつだんだんほんとうになっ
て、こぶしの花が咲かなかったり、五月に十日もみぞれが降つ
たりしますと、みんなはもうこの前の凶作を思い出して、生き
や農業の技師たちと相談したり、意見を新聞へ出したりしまし
たが、やっぱりこの激しい寒さだけはどうともできないようす
でした。
ところが六月はじめになって、まだ黄いろなオリザの苗や、芽を出さない木を見ますと、ブドリはもういても立ってもないかもしれません。このままで過ぎるなら、森にも野原にも、ちょっとああの年のブドリの家族のようになる人がたくさんできるのです。ブドリはまるで物も食べず、毎晩も毎晩も考えました。ある晩ブドリは、クーボー大博士のうちをたずねました。「先生、気層のなかに炭酸ガスがふえて来れば暖かくなるのですか。それならなるだろう。地球ができたからいままでの気温は、たいてい空気中の炭酸ガスの量できまっていったと言われるくらいだからね。」

可ルボナード火山島が、いま爆発したら、この気候を変える
くらいの炭酸ガスを噴くでしょうか。
それは僕も計算した。それがいま爆発すれば、ガスはすぐ大循環の上層の風にまとって地球ぜんたいを包むだろう。そして下層の空気や地表からの熱の放散を防ぎ、地球全体を平均で五度ぐらい暖かくするだろうと思う。

「先生、あれを今すぐ噴かせられないでしようか。」
それはできるだろう。けれども、その仕事に行ったもののうち、最後の一人はどうしても逃げられないのでは。

「先生、私にそれをやらしてください。どうか先生からペンネン先生へお許しの出るようおことばをください。どうか先生からペンネン先生へお許しの出るようおことばをください。」
それはいけない。きみはまだ若いし、いまのきみの仕事にかわれるものはそうはない。

私のようなものは、これからたくさんできます。私よりもつ
ためとなんでもできる人が、私よりもと立派にもっと美し
く、仕事をしたり笑ったりして行くのですから。
その相談は僕はいかん。ペンネン技師に話したまえ。
ブドリは帰って来て、ペンネン技師に相談しました。
うなずきました。
その深い心は、僕がやろう。僕はことしもう六十三
のだ。ここで死ぬなら全く本望というものだ。
先生、けれどもこの仕事はまだあんまり不確かです。
うまく爆発してもまもなくガスが雨にとられてしまうかもしれません。
先生が今度おいでになってしまっては、あとなんともくふうが
つかなくなると存じます。
老技師はだまって首をたれたしまいました。
それから三日の後、火山島の船が、カルボナード島へ急いで
行きました。そこへいくつかのやぐらは建ち、電線は連結され
ました。すっかりしたくができると、ブドリはみんなを船で帰してし
まって、じぶんは一人島に残りました。そしてその次の日、イーハトー
ヴの人たちは、青ざらが緑い
ろに濁り、日や月が銅いろになったのを見ました。
けれどもそれから三四日たちますと、気候はぐんぐん暖かく
なってきて、その秋はほぼ普通の作柄になりました。そしてちよ
ど、このお話のはじまりのようになるはずの、たくさんのブドリや
周りのおとうさんやおかあさんは、たくさんのブドリやネリと
いったしよに、その冬を暖かい了一べものと、明るい薪で楽しく暮
グスコーブドリの伝記
グスクーブドリの伝記
底本：「童話集 風の又三郎」岩波文庫、岩波書店
   1951（昭和 26）年 4 月 25 日第 1 刷発行
   1997（平成 9）年 8 月 4 日第 70 刷発行
入力：柴田卓治
校正：松永正敏
2004 年 1 月 5 日作成
2004 年 3 月 22 日修正
青空文庫作成ファイル：このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。